

青年期における居場所について

吉田 涼

(山 愛美ゼミ)

1. はじめに

近年、「居場所」という言葉が日常的に使われるようになってきている。「居場所」という言葉を聞けば、大半の人が「安心できる場所」などのように心理的意味合いも含めて連想するだろう。このような意味合いが定着し始めたのは1990年代頃からである。元来、「居場所」という言葉は単に「人の居るところ」という物理的な意味合いで使われていた。しかし、不登校や引きこもりといった問題を背景に、「居場所」という言葉から連想される意味合いは変化してきている。近年、「居場所」の研究は教育学や社会学などの様々な分野でも行われている。「居場所」を研究するきっかけとなった不登校などは、青年期によく見られる問題である。青年期は心身共に変化が現れる時期である。そこで、本論文では青年期を中心とした居場所について問題点などをまとめ、考察する。

また、「居場所がない」と感じている人達にも焦点を当てて考えたい。稲村(1986)が、「最近の子どもたちは人間関係が上手く持てないという特徴がある」と述べているように、例えば上手く相手に言葉を伝えられなかったり、親しくする方法が分からなかったりして仲間外れにされたり、いじめに発展してしまう可能性がある。そしていじめなどを受けた者が「居場所がない」と感じ、不登校になるかもしれない。また、家族と上手く付き合えなかったり、社会の中でも必要ないと評価されたりすると「居場所がない」と感じるかもしれない。そのような人達を少しでも、特に精神面から支えられるように「居場所づくり」の研究が行われ、施策が設けられている。それは、フリースペースを作ることなどに限らず、多様な視点から考えられている。「居場所がない」と感じる問題の背景も時代と共に変化するので、「居場所づくり」も時代に合わせて変えていく必要がある。そこで青年

期の居場所と同時に「居場所づくり」についての現状や課題なども取り上げて考察していく。

2. 「居場所」の定義

「居場所」という言葉の定義は明確に定められているわけではない。それぞれの研究者によって定義は少しずつ違う。例えば、居場所の定義を「社会生活の拠点となる物質的な意味での場、自由な場、居心地がよく精神的に安心・安定していられる場もしくは人間関係・一人で過ごせる場、休息・一時的な逃避の場、役割が与えられる・所属感や満足感が感じられる場、他者や社会とのつながりがある場、遊びや活動を行う場、将来のための多様な学び・体験ができる成長の場、自己の存在感・受容感を感じさせる場、安全な場」(藤原、2010)という10種類に分類した研究者もいれば、「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」(則定、2008)と定義している研究者もいる。

「居場所」というと、「安心して落ち着いて居られる場所」という意味を連想する人がほとんどだろう。また、「居場所がない」という言葉も日常生活の中でニュースや新聞などでもよく目にする。ところが、はじめに居場所の研究が行われた頃は、「居場所」の定義は「人の居るところ」といった物理的な意味でしか使われていなかった。その後は、藤原(2010)によると、「1980年代には子どもの不登校問題から居場所という言葉がより異なる使われ方をするようになり、居場所が不登校の子どもや若者の状況を表現し、支援を行うための場としての意味を持つようになっていった」と言う。つまり、子どもの不登校の問題が社会で注目されるようになってからは、物理的な意味ではない「居場所がない」という感覚を持つ人が増え、「心の居場所」として心理的側面も加え

た意味へと変化していったのだ。さらに、中藤(2013)は、「これまで『居場所』についてなされてきた研究においても、『居場所』があるという感覚を指す『居場所感』あるいは『居場所感覚』といった純粋に心理的・主観的次元に焦点を当てた研究もあれば、どのような建築や空間が人にとって居心地の良い『居場所』となるか、またどういった他者と一緒にいる空間が『居場所』となるかといった物理的・客観的次元に焦点が置かれている研究もある」と述べている。「居場所」をどの次元で捉えるかによって、研究内容は異なる。

ただ、海外の研究では現在でもほとんど物理的な意味でしか使われていない。杉本・庄司(2006)は、「海外の研究では日本で現在使用されているような、心理的側面を含めた意味での『居場所』は、言葉の概念自体がないために、研究は行われていない」と述べている。また、藤原(2010)も「国外では、日本のように心理的側面を含めた居場所のような概念がないために、研究はほとんど行われていないのが現状である」と述べている。このことから、心理的側面を含めた「居場所」という言葉は、これまでの日本の文化が影響して成り立った日本特有の概念であるということが分かる。

では、「居場所」の中に心理的側面が加えられた背景についても詳しく考える。主要要因としては「不登校」問題がある。西中(2014)は「居場所という言葉が頻繁に使われるようになったのは1980年代後半の不登校の増加が発端であり、学校に居場所がない子どもたちのための『居場所づくり』が言われるようになった」と述べており、その後も居場所づくりが盛んに行われるようになった。杉本・庄司(2006)は、「子どもの『居場所』への関心は、『居場所』がないことへの注目から、『居場所』を作るという動きに進展しつつあるといえる」と述べている。学校や家に「居場所がない」という感覚から不登校になり、その数が増えたことにより「居場所」という言葉が注目され、「居場所づくり」の動きが増加したことにより、今では「安心して落ち着いて居られる場所」という心理的側面を含められるようになったと考えることができる。

また、一概に「居場所」といっても、人と一緒にいることが「居場所がある」ということにはな

らないだろう。1人で居ることに対しても苦痛を感じない、1人で居たいという時もあると思う。阿部(2011)は、「『ひとりの居場所』だけしかないのは問題ですが、『ひとりの居場所』は立派な居場所」と述べている。また「居場所とは客観的な状況がどうなっているかではなく、本人がそこを居場所と感じているかどうかによってしか測ることのできない、極めて主観的なもの」とも述べている。これは1人で居る事が本人にとっては居場所なのであれば、それは他人が干渉することではないとも考えられる。

3. 居場所のなさについての問題

「人と一緒にいることが『居場所がある』ということにはならない」と述べたが、反対に、中には「居場所がない」と感じている人もいるだろう。居場所がなく困っているという状況を少しでも解決するために、「居場所がない」という感覚や性質を考える必要がある。次に「居場所のなさ」についての原因や問題について考える。

「人の行動は、そのときにその人がおかれている自然的環境や社会的環境によって、さまざまな影響を受けている」(詫摩・稲村、1980)ため、人によってももの受け取り方は違い、不登校になる原因も人それぞれである。そのような考え方も含めて、「居場所がある」という視点から研究している者もいれば、「居場所がない」という視点から研究している者もいる。「居場所」を理解するにあたって、どちらも大事な視点だが、「居場所がない」という感覚が子どもにどのような影響を与えているのかまずは知る必要があると考える。

萩原(1997)は、「『居場所』とは何かという定義は、彼らの居場所喪失経験から照らし出されてくる」と述べており、清水(2012)は、「『居場所』がない感覚は、周囲の人との関係や、個人の否定的感情の抱きやすさなど、様々な要因が絡み合っただけで感じられること」と述べている。「居場所のなさ」は、人との関係や個人の感情にもよるが、居場所がないという経験をする事によっても生じてくるものだという事が言える。また、飯田ら(2012)は、大学生を対象とした調査を実施し、「居場所感のなさ」の経験の有無、居場所感のなさ

青年期における居場所について

自己肯定感情の関係を調査した。その結果「『居場所のなさ』という言葉の背景には、逃げ出したいという逃避願望、周囲に人はいるのにひとりぼっちであると感じる孤独感、周囲の動きや流れに上手く乗れず立ち尽くしてしまう戸惑い感が存在することが示唆された」と述べている。これは「大学生の感じる居場所のなさは、程度の差はあれ、その場から早く逃げ出したいという衝動を引き出すこと、自分に対する肯定的な関心の不足により孤独を感じていること、根本的に自分がそこでどうふるまえばよいのか、自分のあり方を見失いかけていることなど、彼らのメンタヘルズに直接影響しうる可能性が示唆された」（飯田ら、2012）ということである。この結果からも、物理的な意味ではない「居場所がない」という感覚を経験したからこそ「居場所のなさ」というものが存在してくるのだと考えられる。

中藤（2012）は、「居場所がない」という感覚が初めにあるという考えから、「居場所のなさ」がどのように扱われてきたのか、「居場所のなさ」についてなされた研究を概観している。結果として、「『居場所のなさ』とは、対人関係における疎外感や、ウチカソトかといった空間構造の混乱に関連して生じる感覚であり、抑うつ感をはじめとする精神的健康やアイデンティティの混乱と関連している」と述べている。青年期は、感情や考え方、感じ方までもさまざまな場面で変化する時期であり、成長する時期でもある。今まで自分が感じていたものが対人関係や周りの環境によって変化したと感じ、混乱するのかもしれない。また、これに関して返田（1986）は、「青年期は新しい生き方が始まる時期であり、子どもの時とは異なった自己意識をもって、自己の身体、性、心と対面し、これをしっかりと所有する。そして、社会の中での自己の立場、役割、使命といったものを見出し自覚していく時期」と述べている。この時期に対人関係、社会的役割の中で自分の居場所を見つけられるかが、これからの人格を形成していく上で重要になってくると考えられる。

また石本・西中（2016）は、居場所欠乏感、友人との心理的距離、友人への同調性の関係を調べるために中学生を対象に調査を行った。結果として、「友人への同調性が低く友人との心理的距離

も遠いといった友人関係に乏しい者は居場所欠乏感を感じる事が多く、友人への同調性が高く友人との心理的距離も近いといった密着した友人関係をとる者や、友人との心理的距離は近いものの友人への同調性は高くはないといった友人関係をとる者は居場所欠乏感を感じる事が少ないということが示された」と述べている。居場所欠乏感を持つ者は、友人関係のあり方を変える必要がある。また、友人への同調で友人関係を築いている者もいるが、心理的距離が遠い者は居場所欠乏感を感じやすい傾向にあるので、同調スキルを身につけるだけではなく、心理的距離が近づけるような関係を築くことも必要である。

これまで居場所のなさに着目してきたが、「居場所がない」から「ある」状態になる研究を行った者もいる。菅原・浅井（2019）は大学生8名を研究対象に調査を行い、「居場所がない」状態がどのようにして「居場所がある」状態になるのかを明らかにした。その結果「『居場所がない』感覚の解消過程におけるアプローチには居場所からのアプローチと個人からのアプローチがあることを想定していたが、ほかに【他者関係】も存在することが考えられ、新しい視点として他者からのアプローチもあげられる」ことが明らかになった。なおここでの【他者関係】とは「話をする相手や悩みを相談する相手を重視すること」と定義されている。居場所がないという感覚は、居場所としている中で他の他者との関係の変化や、居場所を変えたりするだけではなく、相手に相談をしたり、悩みを聞くことによって解消できるということが分かる。

これまで述べてきたように、「居場所がない」という感覚は対人関係や自分の感情によっても左右されるということが分かった。不登校問題が重要視されるようになってからは、居場所がないということを研究するだけでなく、「居場所づくり」というものの研究や取り組みが行われてきた。その取り組みについても触れておきたい。

4. 「居場所づくり」について

ここまで述べてきたように、子どもにとって対人関係や居場所はとても重要なことだ。人格を形成したり、認知的な能力を養ったりする上で人と

の関わりを持つことは必要だが、この時期にいじめや不登校といった問題が生じやすい。「子どもにとっての遊びは、仕事の一つであると例えられることがある。遊びが仕事の対比概念として定義されていることを考えると、一見矛盾しているように思われるが、この例えの真に意味するところは、遊びが子どもの成長にとっては欠かせない行為であるということである」(猿渡、2008)とあるように、子どもの頃は勉強や遊びをすることによって成長していくものである。いじめや不登校にあうということは成長の機会をなくしてしまう可能性がある。そのような子どもたちを減らすべく、近年では「居場所づくり」が盛んに行われている。

初めに居場所づくりが行われるようになったのは、尾木・奥地(2001)と奥地(2006)によれば「フリースクールとよばれる『東京シュール』」である。西中(2014)によれば「東京シュールは1985年に不登校の子どもの親たちが見つけた、学校に居場所がない子どものために『学校教育が行われている昼間の時間帯に、子どもが学び、遊び、活躍する場』」である。このほか不登校などの子どもを対象とした取り組みには、相談指導教室やスクールカウンセリングなどがある。相談指導教室とは心理的な要因等で登校することが難しい児童・生徒を中心に、学校復帰や社会的自立支援へ向けた支援・援助を行う、教育委員会が設置・運営する通室生教室である。一度不登校になると、すぐには復帰できないということから少しずつ練習できる場が増加している。村瀬ら(2000)は、「通所型中間施設における事例を取り上げ、友人・スタッフ・家族による承認と、自信や有能感を与えるような関わりにより、『思春期・青年期の人が立ち直り、社会へと巣立っていく』過程を、居場所という観点から考察している」と述べている。中間施設とは、病院と家庭・地域・社会との中間にある施設のこと、病院から家庭への直接の退院がいろいろな理由で困難なときに利用することができる施設である。

また、不登校の子どもからの視点以外にも居場所づくりは行われている。埼玉県では集会場を利用した施設で「森もり食堂」という、食事の配膳があるまでは自由に遊びや勉強ができるという場

所がある。自習室もあるので、宿題をしたり教材を使って勉強したりすることも出来る。さらに、高校生が立ち上げた「みんなの食堂 Flat(ふらっと)」や、小学4年生から中学3年生までを対象とした塾費無料の「無料塾 ひごぎ」などがある。このような施設があることにより、小さい頃から自主的に勉強をしたり、学校で遊べなくても遊んだりすることを学べる。他にも「こども応援ネットワーク埼玉」という、貧困の連鎖の解消に向け、県が発起人とともに共同で立ち上げた、社会貢献活動などを行う個人や団体、企業のネットワークも存在している。

神奈川県では、老若男女が集う「いせはらみらい クルリン こども食堂」という施設がある。そこは、高齢者や成人している人、一人で来る人もいるし、学習支援とも並行して行われている場所である。また、子育て支援を行っている「こまちぷらす」という施設もある。子どもや高齢者だけではなく、母親になって経験した孤独感や不安感を感じないように作られた場所である。の中には「こまちカフェ」という店もあり、「お母さんたちに両手を使ってゆっくりと、あたたかいうちに料理を食べてもらえるよう、平日のランチタイムには『見守りボランティア』がいて、赤ちゃんを抱っこしたり、店内で遊ぶお子さんを見守る」というボランティアも存在している。居場所といえは、子どもが抱えている問題というイメージはあるが、親たちが共有できる場所も増えている。

さらに、「居場所づくり」は海外にまで活動が広がっている。例えば、「フルハウスプロジェクト」というドイツ・ジョージア・日本の3か国のプロジェクトがある。フルハウスプロジェクトとは、ライブツィヒ・トビリシ・尾道の3都市に3つの交流拠点をつくり、その国と地域の課題に挑むような活動を展開するというプロジェクトである。現在は新型コロナウイルス感染拡大のため活動が制限されているが、ライブツィヒに「日本の家」というものがあり、これは日本チームが立ち上げたフリースペースである。他にも、神奈川県に「在日外国人教育生活相談センター 信愛塾」という在日韓国・朝鮮人の子どもの会として誕生した場所がある。この地域は昔から外国人が多く暮らしてきた場所であり、彼らは学校の授業でも

青年期における居場所について

コミュニケーションが上手く取れず孤立することがある。そのため、支援する場所が必要になることから信愛塾ができたということである。

このように、「居場所づくり」といっても目的や対象者は様々である。不登校問題から「居場所づくり」の必要性が論じられ、「居場所」についての意味合いが変化してきたのと同時に、それに応じて「居場所づくり」も発展してきたのである。しかし、居場所づくりが発展する一方で、それに対する問題も生じてくる。齋藤(2007)は、「『居る』『場所』をつくるという『居場所づくり』によって、逆に、子どもの世界から自由な居場所を奪う可能性がある。『居場所づくり』の議論の中で明確になってきているように、その空間・活動を『居場所』と感じるのかどうかは、子どもが主体的に感じるものであって、そもそも大人がつくって一方的に与えることはできない」と述べているように、「居場所づくり」をすることによって、子どもが安心して過ごせて成長できる場ができたことにはなるが、その場へ子どもを追いやることで、子どもたちが、自由がなくなってしまうとを感じるかもしれないという問題がある。

5. まとめ・考察

本論文では、一般的に述べられている居場所の定義、居場所のなさについての問題、そして居場所づくりについて検討した。日常的に使われている居場所という言葉の定義や歴史を知り、居場所がなく困っている人たちの問題や、それに対して現在行われている施策を知ることにより、青年期の居場所について理解を深めることが目的であった。

近年、居場所という言葉は、心理的な意味で使用されている方が多くなってきているように感じる。不登校問題により居場所づくりが行われるようになり、居場所の意味合いが変化してきた。そして、孤独感や戸惑い感から居場所がないと感じる人が増加したことにより、居場所の重要性が論じられてきた。さらに、それを受けて居場所づくりが数多くなされるようになり、子どもだけでなく親や高齢者、障害者のための居場所づくりも発展している。

現在では、無意識に「居場所」と言葉にしても、

ほとんどの人が「安心」や「落ち着ける」などといった意味を含めて連想すると思う。「居場所」という言葉を調べることには深い意味があると思われた。居場所のなさの問題の箇所で述べた、「逃避願望、孤独感、戸惑い感」の部分は非常に共感できる。友達もいて、周りから見れば充実しているように見えていても、自分の中では孤独を感じていたり、早くこの場から逃げたりしたいという思いを一度は持ったことがある人は少なくないのではないだろうか。このように、居場所の感じ方は自分自身にしか分からないのである。

「居場所づくり」に関しては、それぞれの施設などで目的は違うが、「居場所がない」と感じている人、困っている人のために作られた場所である事は共通しているであろう。子どものためのフリースペースや相談できる施設があり、孤独を感じないように考えられてきたことは、居場所づくりの発展的な部分である。しかし、反対にそのような施設に頼ってしまうと、対人関係や社会の環境で成長できないという問題もあるのではないだろうか。居場所がどこにもなく、孤独を感じて自殺してしまう子どもも中にはいる。そのような子どもにはまず、孤独感や不安感をなくしてあげることが重要だが、強制的に居場所を作るのもあまりよくないという点が、居場所づくりを考える上でとても難しいところである。決して孤独を感じるということが問題なのではない。孤独を感じるという自由を奪ってしまうのが問題なのである。

今後も、居場所とは何かについて考え続け、いじめなどが減り、必要な人への学習や対人関係の支援などが増えることにより、子どもたち一人一人が成長できる場を提供できることが重要であると考ええる。

引用文献

- 阿部 真大 (2011) 居場所の社会学 生きづらさを超えて 日本経済新聞出版社, 47.
 藤原 靖浩 (2010) 居場所の定義についての研究 教育学論究, 169-177.
 萩原 建次郎 (1997) 若者にとっての『居場所の意味』日本社会教育学会紀要, 37-44.
 飯田 沙依亜、他 (2012) 大学生の居場所に関する

- 研究 - 居場所のなさに着目して - 愛知工業大学研究報告第46号, 49-55.
- 稲村 博 (1986) いじめ問題 - 日本独特の背景とその対策 - 教育出版, 34.
- 石本 雄真・西中 華子 (2016) 中学生の居場所欠乏感と友人関係のあり方との関連 教育研究論集第6号, 13-18.
- 村瀬 嘉代子、他 (2000) 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ - 通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因 - 心理臨床学研究, 8, 221-232.
- 中藤 信哉 (2012) 『居場所のなさ』についての研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 58, 209-220.
- 中藤 信哉 (2013) 心理臨床における『居場所』概念 京都大学大学院教育学研究科紀要, 59, 361-373.
- 西中 華子 (2014) 居場所づくりの現状と課題 神戸大学発達・臨床心理学研究, 13, 7-20.
- 則定 百合子 (2007) 青年期版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会第26回大会発表論文集, 475.
- 尾木 直樹・奥地 圭子 (2001) 連載対談 尾木直樹の教育を語りませんか (第4回) 子どもの目線で考える居場所づくりを, 18, 30-35.
- 奥地 圭子 (2006) フリースクールが求めてきたもの - 東京シュレ 20周年を迎えて 子どもの権利研究, 8, 28-34.
- 齋藤 史夫 (2006) 子どもの『居場所づくり』の可能性と課題 早稲田大学大学院文学研究科紀要, 第1分冊, 52, 121-129.
- 猿渡 智衛 (2008) 子どもの居場所づくりに関する政策の現状と効果、課題 弘前大学大学院地域社会研究科 第5号, 53-74.
- 清水 寛子 (2012) 中学生の『居場所のなさ』に関する研究 佛教大学大学院紀要. 教育学研究科篇, 71-88.
- 返田 健 (1986) やさしい心理学 青年期の心理教育出版, 96.
- 菅原 夏海・浅井 継悟 (2019) 『居場所がない』から『居場所がある』への変容プロセス - 大学生の居場所に関するエピソードから - 北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要, 16, 73-88.
- 杉本 希映・庄司 一子 (2006) 『居場所』の心理的機能の構造とその発達の変化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 詫摩 武俊・稲村 博 (1980) 登校拒否 どうしたら立ち直れるか 有斐閣, 64.
- 米本 麻世・岡本 祐子 (2010) 青年期における心理的居場所に関する研究 - 心理社会的発達の視点から - 広島大学心理学研究第10号, 229.

参 考

- 埼玉県 子供の居場所づくり推進事業 こどもの居場所づくり事例集 埼玉県福祉部少子政策課 こどもの未来応援担当 (2020) http://kodomoouen.prefsaitama.lg.jp/pdf/jireisyu_s2.pdf
- フルハウスプロジェクト https://motion-gallery.net/projects/full_house_project
- KANAGAWA CASE BOOK 2019 子ども・若者の居場所づくり事例集 社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会 (2019) http://www.knsyk.jp/s/shiru/pdf/jirei2019_full.pdf
- 不登校対策・対応取り組み事例集 - だれもが行きたくなくなる学校をめざして - 相模原市青少年相談センター 36-37 (2019) <http://www.sagamihara-kng.ed.jp/soudan/project21/futokotaisakujireishu.pdf>
- 中間施設について <http://asaka.or.jp/dictionary/detail/270/>